

が参加した。(1面参照)

沼田市1年

原発・放射能を考える

「がれき受け入れ慎重に」

1986年のチェルノブイリ原発事故で被ばくの影響を調査したベラルーシのゴメリ医科大学初代学長、ユーリ・パンダジエフスキーさんが11日、那覇市で「チェルノブイリの経験から学ぶ講演会」(主催・放射能防御プロジ



ユーリ・パンダジエフスキーさん

ベラルーシで被ばく調査

「がれき受け入れを慎重に」(エクト)をテーマに講演した。パンダジエフスキーさんは仲井真弘多知事が岩手、宮城両県のがれき受け入れを検討していることについて「汚染されていない場所(沖縄)は限られており、そうした場所ではがれきを処理するよりも、汚染されない食品をつくった方がいいのではないか」と述べ慎重な対応を促した。日本政府の放射能への安全対策について、ベラルーシ政

府が安全性を強調し過ぎたあまり、精密な調査が行われず人体への被害が数年後に一挙に深刻化したことと重ね合わせ「特に子どもたちの健康被害をもっと厳密に調べる必要がある」と述べた。

講演後は、パンダジエフスキーさんと矢ヶ崎克馬琉球大学名誉教授、放射能防御プロジェクトの木下黄太さんが意見交換。放射能の人体への安全基準がドイツなどに比べて日本は高く設定されており、健康被害が見過ごされていると批判した。

まきくわい、いん、いん、いん、いん

「もに、震災被害に触れ「津

地